「光あふれるクリスマス」

2024年12月

高校教頭　慎 繁範

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。
万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。
言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。
暗闇は光を理解しなかった。… その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。
（ヨハネによる福音書1章1～5節、9節）

早いもので、2024年も残りわずかとなりました。イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスが待ち遠しい季節です。街中はイルミネーションやクリスマスツリーで飾られ、華やかでロマンチックな雰囲気に包まれています。ユニバーサル・スタジオ・ジャパンには、高さ30メートルを超える巨大なクリスマスツリーがあり、音楽に合わせて光り輝く姿が多くの人々を魅了しています。ご覧になった方も多いでしょう。電気がなかった時代でも、クリスマスツリーにはキャンドルが灯され、温かな光が人々を照らしていたといいます。現代のクリスマスは、経済活動の一大イベントでもあります。街の活気を演出し、人々の消費意欲を刺激する手段としてイルミネーションが活用されています。しかし、クリスマスと光には、それ以上に特別な関係があるのです。

実は、イエス・キリストの誕生日は正確にはわかっていません。では、どのようにしてクリスマスの日が決まったのでしょうか。それは「太陽」の動きと深く関係しています。北半球では、クリスマス直前に太陽が出ている時間が1年で最も短くなる「冬至」があります。冬至を過ぎると、昼の時間が日に日に長くなり、太陽の光の力強さが感じられるようになります。古代ギリシャやローマでは、12月25日前後に「永遠の太陽の誕生日」と呼ばれる盛大なお祭りが行われていました。再生する太陽と春への期待を祝ったのでしょう。キリスト教では、このお祭りに合わせてクリスマスを12月25日に定めたと言われています。

イエス・キリストを地上に等しく光をもたらす太陽になぞらえるのはなぜでしょうか。上掲の聖句のように、聖書ではイエス・キリストを「義の太陽」や「すべての人を照らすまことの光」と表現しています。これに対し、私たちは光とは真逆の「闇」の中に生きています。聖書で闇とは人間の「罪」、それによってもたらされた「死」を表しています。闇に光が射し込むと、不安や恐れは消え、希望にあふれた救いを受けられるのです。まことの光として闇を照らすイエス・キリストの誕生をお祝いするクリスマスにおいて、イルミネーションやキャンドルの光は、私たちの唯一の希望である救いの象徴なのです。

物理学的にも光は特別な存在です。一般的に波としての性質を持ち、真空中でも伝播します。その速さは秒速約30万kmであり、これ以上速いものは存在しないと考えられています。アインシュタインの一般相対性理論の基本原理の一つに「光速度不変の原理」があります。これは、時間や空間の絶対的な基準が光であるという考え方です。この理論に基づいてアインシュタイン方程式を解くと、宇宙は約138億年前に極めて高密度・高温の状態から始まり、それが急速に膨張したという結論が導き出されます。これは宇宙がビッグバンから始まったことを示しています。このビッグバンにより最初の光が放たれました。この光は、宇宙マイクロ波背景放射（CMB）として現在でも観測することができ、ビッグバン理論を裏付ける重要な証拠となっています。

「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。」（創世記1章1～3節）

旧約聖書はこの文章で始まります。天地創造の最初に神が創造された「光」は何を指すのでしょうか。私はビッグバンで放出された「光」と、時間と空間の絶対的基準である「光」が創造されたと解釈できるのではないかと考えています。神は天地創造の前から、まことの光であるイエス・キリストをこの世に送り、人々を闇から救う計画を立てておられました。クリスマスを待ち望む特別な季節、電飾の小さな光を見るたびに、神様の壮大な計画に思いを馳せ、まことの光であるイエス・キリストのことばに耳を傾ける機会としてください。

メリークリスマス!